

病害診断の現場から—顕微鏡を覗くこと—

今回は、病徴だけでは診断が難しいものの、顕微鏡を覗けば瞬時に診断できる事例です。



ミズナの葉柄に紡錘形の斑点を生じている画像（上）が送られてきて、この病徴だけからの診断を求められました。*Stemphylium*や*Cercospora*などによる斑点性病害のようにも見えますが、いずれもミズナ（キョウナ）の既知病害にはありません。症状が進行すると病斑部分から腐敗折損するようで、既知の病害から選ぶとすれば軟腐病の初期症状かというところです。

しかし、病徴だけでは診断が難しいものの、これだけの明瞭な症状ですから、検鏡すればすぐに病名確定できると考えられ、実物の持ち込みをお願いしました。

病斑部分を剥ぎ取ってプレパラートにして顕微鏡を覗くと、組織内に*Rhizoctonia*の菌糸が蔓延しているのが容易に観察できました（中）。意外やキョウナ（ミズナ）リゾクトニア病と判明しました。

リゾクトニア菌は地際部から感染する特徴がありますが、これは葉柄のかなり上の方に出ています。軟弱で混み過ぎた生育と過湿が発生要因と考えられます。

この時期の薬剤対応としては、銅水和剤か水和硫黄剤の散布しかありませんが、発生部位が土中や地際ではなく茎葉部なので、ある程度の効果は期待できそうです。

「キョウナ（ミズナ）リゾクトニア病」の病名異名には「尻腐病」があります。たしかにハクサイ尻腐病の病斑（下）をそのままミニチュアにした症状です。

顕微鏡による診断の後、ふたたび病斑、病徴を観察することにより、病原菌と病徴の関係に対する理解がさらに深まります。

